

教員志望学生が地域協働プロジェクトを 経験する意義に関する一考察

—「うわじま∞あいだいプロジェクト」の取組から—

藤原 一弘¹⁾, 井上 昌善¹⁾, 西尾 祥之²⁾

1) 愛媛大学教育学部

2) 愛媛大学地域レジリエンス学環, 宇和島市役所

A Study on the Significance of Experiencing a Community Collaborative Project for Prospective Teachers: The Approach of the “Uwajima ∞ Aidai Project”

Kazuhiro FUJIWARA¹⁾, Masayoshi INOUE¹⁾, Yoshiyuki NISHIO²⁾

1) Faculty of Education, Ehime University

2) Interfaculty Initiative for Regional Resilience, Ehime University,
Uwajima City Hall

1. 問題と目的

(1) 地方の現状と教育

少子化, 高齢化, 人口の都市部一極集中による地方の衰退, 過疎化は, 令和の時代に入り一段階レベルを上げて急速に進み始めた。その状況は, コロナ禍や度重なる甚大な自然災害を通じてさらに速度を増し, 都市部と地方の「絶対的格差」と「再興の限界」を否応なしに突き付けてくる。地方創生や地域再生は各地で行われているものの, 外部の力を借りた一過性のイベント的なものも多く, その効果は限定的で, 真に地方が力を付け, 主体的で持続可能な取組にまで至っているとは言い難い場所も多い。

一方で地方における教育に目を向けるとその影響はさらに深刻で, 学校の小規模化, 統廃合が加速度的に増加している。「地域から学校が無くなることは, もはや当然」の状況になりつつある。地方で学ぶ子どもたちが中学校・高等学校を卒業すると, 進学先や就職先を求めて都市部へ流出するため地元には残らないことが多く, 一層その状況に拍車がかかっている。地方で教育を受ける意義をこれからも見出せるのか, 学校教育が地域で果たす役割はあるのか, さらに言えば教員養成を行う大学が, 教員を志望する学生にどのような学びや経験を提供することが有益なのか。改

めてその責任と覚悟が問われている。

(2) 子どもたちの現状と課題

過疎化が進み, 子どもの数が減少することで, 地域の活力が失われ, 地域社会の担い手がなくなる, という問題だけではない。子ども同士の関わりや協働的に学ぶ機会が減少し, 必要な資質・能力を育成しづらい状況になっている。

加えて, 近年では子どもたちの現状として頻繁に取り上げられるものに, 子どもたちの主体性や主権者意識・参画意識の低さを指摘した各種調査がある。例えば, 日本財団が実施した第62回18歳意識調査「国や社会に対する意識(6カ国調査)」(2024)では, 自身と社会の関わりに関する項目において「自分の行動で, 国や社会を変えられると思う」と回答した割合が参加国中最下位(45.8%)で, 中国やインドと比べると約半分であること, 「政治や選挙, 社会問題について関心がある」「政治や選挙, 社会問題について, 自分の考えを持っている」「政治や選挙, 社会問題について, 積極的に情報を集めている」などの項目でも最下位となっていることなどから, 日本の若者, 特に10代の子どもたちは, 主体性に欠け, 社会への参画意識が低いことが課題に挙げられている。また, 子ども家庭庁が実施した「我

が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査（令和5年度）」においても、「社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関わりたい」「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」といった項目で、諸外国に比べ「そう思う」と回答する割合が、有意に低くなっている。

これらの調査を受けて、より積極的に社会問題や課題に関心を持ち地域に愛着を抱かせることで主体的に地域に関わる意欲をもった児童生徒を育成しようとする取組が、学校教育や各地域でも盛んに行われるようになってきている。

その結果、子どもたちに多様な経験を積ませ、協働的に課題解決を行う活動や取組は、以前に比して増加してきたものの、未だ十分と言える状況にはなっていない。

それどころか学校が地域活性化の拠り所にされ、子どもたちが地域に駆り出される。学校と地域の連携、地域文化や地域社会の維持と継承を強調・強要するあまり、子どもたちが地域行事に関わるのが盲目的・無批判に良いこととされ、「地域のリーダーとして活動せざるを得ない状況」が生まれている。そこには、中高生が主体的に地域のために関わろうとする姿は少なく、ただ「入試に有利になるために仕方なく」取り組み、活動実績をポイント稼ぎとして参加している姿が存在しているのではないだろうか。このような現象は、少子化が進む地方ほど顕著に表れている。もちろん、中高生を中心とした子どもたちが真に地域に愛着を感じ、地域の課題を理解し、自主的・主体的に動いている好事例もあるが、まだまだ一部に限られているのが現状である。地域の中で学校が果たすべき役割とは何なのか、地域の課題に向き合いながら地域の中で活動することは生徒にとってどのような意味を持つのか、児童生徒だけでなく教員側の意識や姿勢にどのような影響や効果をもたらすのかを明らかにしていく必要がある。地域の人々が、中高生が地域に愛着を感じ、地域の為に活躍するリーダーとして成長することに期待を大きくかける一方で、中高生自身が本当に必要感と納得感を持って活動に参画し、自らの個性を発揮し、資質を伸ばせる場として位置づいているかは真摯に問い直すべきである。

(3) 本取組の目的

上述の問題意識を踏まえ、次の2点を目的とした取組を実施することとした。1点目は子どもたち、特に持続可能な地域づくりに欠かせない存在となる中高生にとって、地域の中で主体性や主権者意識を育める学びの場の構築は喫緊の課題である。少子化が進む地域の学校ではできない協働的な学びを、地域主体で行うことで校種を越えた関わりが可能となり、さらに地域課題解決を継続的に行うことで、生徒の意識や行動にどのような変容が見出せるのかを確認したい。

2点目は、上述の取組に教員志望学生が関わることで、学生にとってどのような意味・意義が見出せるのかを検証することである。特に、本学部は愛媛県の中心部であり県庁所在地である松山市にキャンパスを置き、教員養成を主たる目的とする学部として、これまでも愛媛県内外に多くの学校教員を輩出している。それ故、実習や教育体験がどうしても人口の多い大学周辺部で行うことが多く、過疎地域の現状を知る機会が少ない。しかし、これからの日本社会、学校教育の在り様を考えたとき、過疎化が進む地域で教員としてキャリアを積んでいく者も増加することが予想される。少子化が進む県内の各地域に出向き、中高生と共に地域の課題解決活動を行うことで、参加学生の教員としての資質向上や意識醸成にどのような影響を与えるのか、参加学生の声を拾いながら、その意義について検証したい。

以上の目的遂行のため、今回は「愛媛県宇和島市」をフィールドに中高生と教員志望学生が協働的に行う地域課題プロジェクトを実施することとした。

2. プロジェクトの実施概要、活動方法

(1) 実施概要及び経緯

本プロジェクトを初めて実施したのは令和3年度である。当該年度の「愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革GP）」に採択されてスタートした取組も、令和6年度で4年目を迎えた。当時採択された事業名は「教員志望学生が地域と協働して取り組むESD／SDGsプログラムの構築（うわじま∞あいだいプロジェクト）」であり、この主旨は現在も引き継がれている。令和3年の成果を引き継ぐ形で、令和4・5年度には「宇和島市地域調査研究事業補助金」に申請・採択されて実施した。

現在は、実施自治体である愛媛県宇和島市と愛媛大学教育学部の「共催」となり、宇和島市の予算の中に本プロジェクトが組み込まれるまでに成長した。実際には、宇和島市教育委員会の全面支援を受け生涯学習課管轄の宇和島市立中央公民館（通称「ホリバタ」）を主会場に、宇和島市内全域をフィールドとして、教育学部を中心に教員志望学生が20名前後、宇和島市内の中学校・中等教育学校・高等学校に通う中学生・高校生有志が10名～30名（年度によって異なる）程度参加し、地域課題解決活動を中心に、主体的で協働的な学びと活動を行っている。

(2) 実施内容及び方法

これまで4年間の「うわじま∞あいだいプロジェクト」の実施内容は以下のとおりである。

表1 「うわじま∞あいだいプロジェクト」の実施内容

| 年度 | 実施内容及び実施地域 (☆) |
|-----|--|
| 令和3 | 宇和島市内でフィールド調査を行い、見出した地域課題をテーマごとにグループに分かれ、できることを実践・実行する。 ☆宇和島市内中心部 (商店街・駅周辺) |
| 令和4 | 宇和島市の基幹産業である水産や柑橘をはじめ情報通信などの地域産業を学び、主権者意識の醸成を図るべく調査・発信する。 ☆宇和島市内中心部・周辺部 |
| 令和5 | 令和7年度に移転する宇和島市立喜佐方公民館を取り巻く状況を調査し、持続可能な公民館の在り方について協議・発信する。 ☆宇和島市吉田町喜佐方地区 |
| 令和6 | 廃校を活用した地域イノベーション拠点で、地域と都市を繋ぐ持続可能なコミュニティづくりを学び参画意識の醸成を図る。 ☆宇和島市石応地区 |

(令和6年度は執筆時、実施途中)

毎年度、テーマや調査場所を変え、宇和島市全体をフィールドにしていることが大きな特徴である。次節以降は、特に成果を上げた令和5年度の取組を中心に、その詳細と成果について大学側と受け入れ自治体側からそれぞれ報告する。

3. 実践の実際

本実践は、宇和島市立中央公民館「ホリバタ」、喜佐方公民館、愛媛大学が連携することによって行う課題解決型のプロジェクトである。人口減少ともなっており地域で生じているリアルな課題と向き合い、その解決方法を提案することによって、それがどのように受け止められるのかを体験することで、社会と関わることに意味を見出すことをねらいとして設定した。宇和島市に住む中高生とともに、公民館とは何か、喜佐方地域に必要なものは何かというテーマについて、地域の聞き取り調査などを通して考え提案する活動を行った¹⁾。以下の表2は、本実践の概要を示したものである。

表2 令和5年度うわじま∞あいだいプロジェクトの概要

| 回数 (日時)・場所 | 内 容 |
|------------------------|--------------------------------------|
| 第一回 (7月15日) ・ホリバタ | 開講式、本プロジェクトの趣旨、公民館の目的 |
| 第二回 (8月27日) ・愛媛大学 | 喜佐方地区のアンケート調査の結果、公民館の利活用、こども基本法の概要 |
| 第三回 (10月7日) ・喜佐方公民館 | 南四国ファーム、JA 選果場、喜佐方小学校見学、地域住民への聞き取り調査 |
| 第四回 (11月5日) ・喜佐方公民館 | 「まちかどカフェ」への参加、地域住民への聞き取り調査 |

| | |
|-------------------------------|-----------|
| 第五回 (12月23日) ・JA えひめ南喜佐方支所 | 成果報告会、閉講式 |
| 第六回 (3月14日) ・ホリバタ | 全体の振り返り会 |

第一回は、開講式が開催され、宇和島市長の岡原文彰氏より、ご挨拶をいただいたうえで、本プロジェクトの趣旨について愛媛大学教育学部の井上昌善准教授から社会と関わることの意義について説明があった。また、ホリバタの村尾智幸氏と首藤将文氏より公民館の目的やフィールドとなる喜佐方地区について説明をしていただいた。その後、ボードゲームなどを通して、大学生と中高生との交流会を実施した。

第二回は、まず、愛媛大学教育学部の藤原一弘准教授より、喜佐方地区の地域づくりに関するアンケート結果についての報告があった。つぎに、大学生より公民館の利活用を考える上で、地域住民の願いや思いに加え、持続可能性や客観性の視点が重要になることが提案された。そして、浦和大学の林大介准教授の講演が行われた。本講演より、こども基本法に基づく社会では、子どもの権利 (①生存、②発達、③保護、④参加) が尊重される必要があることを学び、それを実践するための具体的な行動について考えを巡らせることができた。

第三回は、実際に喜佐方地区を訪れ、地域住民の方々と交流を通して公民館の利活用について考える活動を行った。まず、南四国ファーム、JA 選果場を見学し、ミカン産業の現状や課題について理解を深めた。つぎに、公民館が移転される喜佐方小学校を訪れ、小学校の教室をどのように公民館として利活用していくかを考えつつ見学を行った。そして、グループに分かれて地域住民の方々に聞き取り調査を実施し、これからの喜佐方公民館の在り方、そのための計画について考えを深めた。各グループから、これからの喜佐方公民館のキャッチコピーとして、「みんなの居場所」、「楽しく賑やかな場所」などが報告され、よりよい公民館づくりについて活発な意見交換が展開された。

第四回は、喜佐方公民館で開催された「まちかどカフェ」に大学生や中高校生が参加し、地域の方々と交流を通して、これからの公民館や地域に対する思いや願いを調査した。まず、大学生や中高校生は、「カフェ」、「フェイスペインティング」、「モルック」、「ビンゴゲーム」のグループにわかれて、訪れた地域住民の方々と交流を通して、聞き取り調査を行った。つぎに、聞き取り調査した内容をグループで整理し、全体で発表を行った。そして、第三回の調査内容と比較することを通して、これからの公民館の利活用について考えを深めていった。多くの地域住民の方々から、「来年も来てほしい」というお言葉をいただくことで、地域社会に関わることに意味を見出すとともに、地域づくりにおける関係人口の重要性を実感することができ

た。

第五回は、成果報告会と閉講式が行われた。まず、成果報告に向けて、各グループで報告内容や役割の分担などの準備を進めた。つぎに、各グループの提案をまとめたポスターセッションを行い、参加している中高生や大学生、地域住民の方々と意見交換をした。そして、各班が考えた「真・喜佐方公民館の姿～共に創ろう！笑顔と出会いの喜佐方公民館～（グループ1）」、「世代間の架け橋～ニュータイプ喜佐方公民館～（グループ2）」、「おいでよ あつまれ 喜佐方の家（グループ3）」、「子どもと大人をつなげる公民館（グループ4）」、「子育ての拠点となる公民館～地域の子育ての中心に～（グループ5）」というテーマのもと、オリジナルのアイデアを行政担当者や地域住民の方々に向けて発表した（写真1）。

参加された地域住民からは、「発表の内容を参考にして公民館づくりを進めていきたい」という言葉をいただくことができた。

第六回は、全体の振り返り会を行い、今年度の本プロジェクトの成果が実際の公民館の改修にどのように活かされるのかという点について見直しを確認し、次年度に向けたプロジェクト改善のための方向性について意見交換を実施した。



写真1 成果報告会の様子

4. 参加学生の感想分析（本プロジェクトの教育的効果）

本プロジェクトの教育的効果について、参加学生へのアンケート調査の結果や感想の分析に基づいて考察する。以下の図1は、本プロジェクトの満足度に関する調査結果である。今回は、自分たちが考えたことを地域社会に提案する学びに対する意味を見出すことができたか、地域社会と学校とのつながりを見出すことができたかという観点から満足度を判断するようにアナウンスを行い、参加者に回答してもらった。

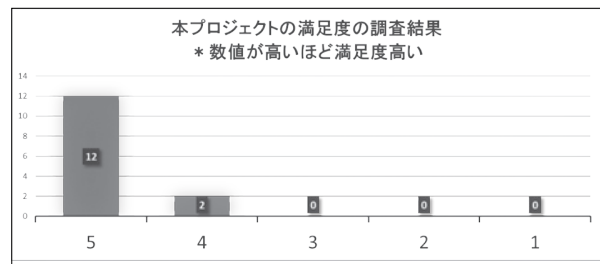


図1 本プロジェクトの満足度（N=14）

図1より本プロジェクトに対して、全ての教職志望の学生は満足度が高いことがわかる。このことから、本プロジェクトを通して地域協働に対する意義を見出していると言える。その要因について、当該学生の感想を分析することによって検討する。感想の記述を分析すると、教員志望の学生の本プロジェクトに対する意義付けについて、次のようにタイプ1～タイプ3に分類することができる（表3）。

タイプ1は、多様な他者と関わることに對して意義を見出している。多くの学生は、授業を受けるという行為は、あくまで特定の教師から知識を教授されるという見方を持っている傾向になる。本プロジェクトを通してこの見方が転換され、自己の知的成長を実感するようになっていることから、多様な他者と関わることに對する意義付けが促されたと推察できる。

タイプ2は、自己の判断や行動の社会的影響を実感的に

表3 感想の分析結果

| 傾向 | 主 な 感 想 |
|-----------------------------------|--|
| タイプ1 多様な他者と関わることに對して意義を見出している。 | <ul style="list-style-type: none"> ○<u>地域の人と交流をしながら学習をすることができて</u>、話を聞く授業よりやる気が湧いた。 ○外に出て実践的な学びと報告を行うことができたから。 ○<u>何も知らない地域に入ってその土地の問題について考える活動</u>は初めてであったため、非常に良い経験になったから。また、<u>様々な人と交流ができ、自分の視野を広げることができた</u>から。 ○プロジェクトの到達点がよく分からなかったが、<u>地域の人との交流を通して過疎地域の現状を知ることができた</u>から。 ○実際に現地に行き、<u>いつも関わる人と違う人と話し合い発表していくという普段とは違う活動ができ、貴重な経験</u>になった。 ○<u>様々な人と関わり、交流することは</u>普段の授業では難しいことだと思うので、とてもいい機会になった。また、<u>授業では関わらない人と関わることで、色々な視点からアドバイス</u> <u>いただけただ点</u>も本プロジェクトのいい点だと思う。 |

| | | |
|-------------|--|--|
| <p>タイプ2</p> | <p>自己の判断や行動の社会的影響を実感的に理解することによって意義を見出している。</p> | <p>○本プロジェクトでは、<u>実際にどういことをすればより良いものを作り、採用してもらえるのかを考えること</u>で自分ごととして考えることができたから。</p> <p>○<u>実際にヒアリングから提案までを行うことができ、自分が社会に参加していると実感することができた</u>ためである。</p> <p>○総合の授業や社会科の授業やSDGsで地域連携についての重要性を学んだが、<u>今回のプロジェクトで実際の地域連携について触れること、また、自分たちの意見が社会に反映される方法について学ぶことができ、これからの授業実践に活かせる</u>と思ったから。</p> <p>○大学の講義では現状や課題をインプットするだけにとどまるが、<u>実際に地域に行くことによって、五感を通してインプットすること、また他者に発信するという形でアウトプットすることができ、自分が社会の一員であることをより実感することができた</u>から。</p> <p>○率直に楽しかったです。公民館について学びたいと常々考えていたところ、このプロジェクトの話を聞いて参加したいと思ったのがきっかけでした。実際関わって地域の方のお話を聞くと、<u>地域に対する愛やもどかしさを直で受け取ることができ、また地域の方々が私たちの発表を受け止めていただいて、より喜佐方の公民館に貢献したい気持ちが大きくなりました</u>。そして、受け止めていただく姿を見て、やっぱりまちづくりは楽しいなと思ったからです。</p> <p>○<u>実際に社会の取り組みに意見や提案をするということは授業ではできないこと</u>であり、とても貴重な経験ができた。また昨年のプロジェクトにも参加したが、<u>今回は第1回から最終回まで公民館の利活用の提案という1つの目標に向かってプロジェクトが進んでおり、達成感があった</u>。</p> <p>○<u>大学に講義では学ぶことのできないこと</u>を、実際に地域の方々の声を聞き、また、その地域に住む中高生の考えと照らし合わせながら、より良いまちづくり、公民館づくりをしていくための提案を考えることができたから。</p> |
| <p>タイプ3</p> | <p>学校と地域の学びを関連付けて、学びの在り方を考えることに意義を見出している。</p> | <p>○このプロジェクトでは、<u>地域での学びについて考える中で、学校教育と繋げて考えることができる</u>。そこで、<u>これまでの講義の内容や実習での経験と繋げて、中高生との関わりや活動の中で、プロジェクト内外で、自分がどんなことをしたいのか、何が足りないのか考えるきっかけ</u>になった。プロジェクトとしては、社会科教育や、中高生との関わりの色が強いが、<u>地域での学びの場、また地域の中の学校について考えることができる</u>。さらに、市役所の方や教育委員会の方とお話する中で、違う立場の方と意見交換でき、他にはない経験だと思う。</p> |

理解することによって意義を見出している。本プロジェクトでは、地域課題について考えたことが、地域社会に対してどのようなインパクトをもたらすのかという点について、学習者が確認する場面を設定していた。自分たちの提案を地域住民がいかに受け止めるのかを体験することによって、社会の創り手としての主権者意識が形成されていったと考えられる。また、学校内の授業との違いに着目することによって、本プロジェクトを価値づけていると推察できる。

タイプ3は、学校と地域の学びを関連付けて、学びの在り方を考えることに意義を見出している。地域を単に理解する対象と捉えるだけでなく、学びの場と捉え、学校教育との連携や接続を考えることで、これからの学校のあり方や学びのあるべき姿を探究していると推察できる。このことから、この学生は、「学校の地域化」だけでなく、「地域の学校化」に基づく教育を志向していると考えられるのではないか（松岡，2007）。

以上の結果をふまえ、これから求められる「地域と学校」の関係を検討すると、以下の図2のようになる。

地域社会の問題や課題を学校で積極的に取り扱い、その成果を地域社会に発信する。それを、地域は社会づくりに生かしていくことが、相互作用を促し互恵的で協働的な関

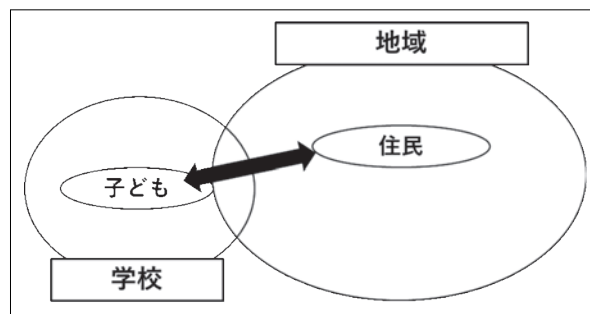


図2 これからの「地域と学校」の関係

係を構築することにつながるのではないかと（井上，2024）。このように、持続可能な社会づくりのための「地域と学校」の関係のあり方を提案している点に本研究の意義が認められると言える。

5. 参加中高生の反応

(1) 募集

年度当初に、宇和島市内6中学校と6高等学校の学校スケジュールを集約してプロジェクトの実施日程を検討するが、考査期間や模擬試験、その他、体育祭や文化祭準備を含めた学校行事等の予定を避けるとなると、その候補はか

なり限られる。そのような状況なので、限られた空いている日程の中に、本プロジェクトが入ることになるので、一定の負担はあると推察される。また、学校行事は反映ができて、個別の部活や大会などは考慮できないため、行きたいけれど、予定が重なって行けないという登録者もいる。

参加者の募集は、市内6中学校と6高等学校にチラシデータなどを配布する形で周知を図り、応募を受けている。

(2) 参加状況と様子

令和5年度のプログラムは、中学生8人、高校生36人が登録してスタートした。しかし、上述の事情等もあり、最終的にプロジェクトに概ね参加できた人数は、中高生合わせて約半数程度（20人程）であった。



写真2 第一回（アイスブレイク）の様子

(3) 反応

参加中高生にとって、自分たちの休みを費やす実施日程で、しかも学校とは異なる同質性の少ない集団での活動となる本プロジェクトは、決して楽ではないプロジェクトであるといえる。

だからこそ、活動のまとめの段階ではいくつかの変容が見られる。参加中高生へのアンケートでは、表3のような回答があった。

「年齢や学校を越えた構成の中で、交流を通じて多様な価値観に触れられ、社会参画体験や地域活動の経験値を積める」という本プロジェクトの特徴が、①多様な世代からの新たな学びや気づき、②プロジェクトで出会った地域への愛着や理解の向上、③経験値を他の地域や課題で生かそうとする姿勢につながっている。

表4 参加中高生へのアンケート結果

| |
|--|
| 普段交流する機会の少ない大学生や高校生の方と一緒に活動することがとても楽しかった。 |
| 今までない視点をたくさん得られて、いろいろなことを考えることができたので、楽しかった。 |
| 今回のプロジェクトを通して、喜佐方の色々な年齢層の人たちのことを知れたり、少子高齢化などの問題について大学生との交流で話し合い考えることができたので今後に活かしていきたい。 |

自分とは直接関係ないことだと思っていたが、プロジェクトを通して、喜佐方への愛着がわいて、喜佐方について自分ごとのように考えることができた。

自分の地元の地域についても、活性化のために自分が何をできるか考えたいと思った。



写真3 愛媛大学訪問の様子

6. 受け入れ自治体にとっての意義

(1) 参加中高生の成長と将来像の育成

このプロジェクトでは具体的な地域や人、課題に関わる活動を重視し、フィールドワークや交流などを必ず取り入れてきた。参加者からは、上述の感想以外にも、「地域を知ることができた」「まちに期待が持てました。」「(中学生の) 私たちにも、できることがあるんだ。」「発表のための研究じゃなかったから、よかった。」「地域を改めて見つけ直したい」という声が挙がっている。シビックプライドの向上や、知識や経験の拡充など、参加中高生それぞれの成長を生み出せる意義がある。

加えて、いわゆる“ななめの関係”の中で、中学生にとっての高校生、高校生にとっての大学生と一緒に活動することが、ロールモデルとの関わりによる将来像の育成に寄与するという意義がある。毎回のグループワーク、ポスターの制作や発表、交流や雑談に至るまで、一ステップ先の人との関わりが刺激になっている。



写真4 第五回（閉講式）の様子



写真5 グループワークの様子

(2) 地域へのプラスの効果

令和5年度のプロジェクトでは、①地域住民への聞き取り調査、②南四国ファーム、JA 選果場、喜佐方小学校見学、③「まちかどカフェ」への参加、④最終的な地域づくりのアイデアの提案の点で、参加者が地域と関わった。

6 (1) のとおり参加者相互はもちろん、活動のフィールドとなる地域にとっても、真摯に学ぶ若者の姿勢や、世代を超えた交流は刺激となっており、「私たちが頑張りたい」「元気もらった」「続けて関わってほしい、また来てほしい」という声が寄せられた。プロジェクト参加者が、フィールド側により良い影響を与えているという意義がある。

(3) 関係人口の創出

参加大学生は、宇和島市出身の方が少ない。本プロジェクトを通じて、年5回程度と限られた回数ではあるが、宇和島市をフィールドとして訪ねることとなる。

全国1,718の自治体で、出身や在住の他に、自治体にとって関係性構築をできる貴重な機会となっていることは、大学生の感想から見て取れる。



写真6 「まちかどカフェ」の様子

残ろう、戻ろう、関わろうとする活動人口を育成したいと取り組んでいるホリバタ事業にとって、関わるためのきっかけづくりとして、関係人口を創出するという意義が

ある。

(4) 教員志望学生のかかわり

将来、宇和島市内の学校に勤務するかどうかに関わらず、このプロジェクトを通じて、リアルな地域資源や課題に触れて考える経験を積むこと、学校教育以外（分野でいうと、ホリバタ事業は社会教育）に関わることは、教員としての幅を広げることとなると考えられる。

教育行政を司る教育委員会にとって、教員志望学生の育ちに関わることができることは貴重であり、意義深いと考えている。

7. 終わりに

令和5年度の実践を中心に、「うわじま∞あいだいプロジェクト」で見出せた教員志望学生にとっての意義と受け入れ自治体を感じている良さについて、参加者の発言を分析することで詳述してきた。これらから分かるように、教員志望学生にとって、少子化・過疎化が進む実際の現場に足を運び、その地域で生活する中高生と関わりながら、協働的な課題解決を行うことで、地域の現状を肌で感じながら視野が広がり、地域での学びに対する見方・考え方が変容していることが読み取れる。加えて、学生自身の将来像として過疎化が進む地域で教員をすること、生徒を地域のリーダーとして育みつつ視野を広げさせ、よりよい地域社会づくりに積極的に貢献し、主体性や参画意識を育てることに対するイメージを持つことができていることが分かる。

また、学生や生徒の発言に関する分析から、「多様な他者との関わり」「自己の判断や行動の社会的影響の理解」「学びの在り方の探究」を保障することが、地域協働プロジェクトを構想・展開するうえでは重要であることが示唆された。地域協働プロジェクトは、実際に社会づくりに参画する営みであり、それに対して学生や生徒がいかに意義を見出したのかという点を明らかにした点に、本研究の成果が認められる。

一方で課題も残されている。本プロジェクトが今後も意義ある取組として継続的に実施するためには、プロジェクトの成果をこれまで以上に自治体内外に発信して、より多くの地域住民を巻き込みつつ、中高生自身がより主体的に参画できるよう、様々な視点からアプローチをしていかなければならない。また、教員志望学生が卒業後も本プロジェクトに関わったり、地元の学校教員が本プロジェクトの企画運営に関わったりすることで、自走する地域協働プロジェクトになってこそ、その意義が真に発揮された状態と言える。これからの学校教育と社会教育の新たな学びの在り方の一端を示せるような取組に発展させられるよう、引き続き取り組んでいきたい。

註

1) 本プロジェクトの様子は、以下のHPに掲載されている。

愛媛大学教育学部井上昌善研究室シティズンシップラボHP
(<https://00m.in/OHHFJ>)

宇和島市ホームページ

(<https://www.city.uwajima.ehime.jp/soshiki/32/uwajima-aidaipurojekuto.html>)

参考・引用文献

井上昌善 (2024) 「外部連携を通して市民性育成を目指す復興まちづくり学習ー被災地における小学校の総合的な学習の時間の単元開発を通してー」 防災教育学会 『防災教育学研究』 第4巻第2号, 1-12.

松岡尚敏 (2007) 「社会科教育における地域連携の動向と展望」 日本社会科教育学会 『社会科教育研究』 NO.102, 1-12.